

甲状腺検査の結果は、深刻な状況

小児甲状腺がんと診断された子どもは、前回から2人増加し175人となった。136人が手術を受け、135人ががんと確定した(良性結節1人)。本格検査で見つかった59人は、先行検査でA1判定28人、A2判定26人、B判定5人。甲状腺外科医である清水一雄委員(日本医科大学名誉教授)は、「小児甲状腺がんはアグレッシブで発育速度も速いと理解しているが、今回3.5センチの腫瘍(先行検査ではA判定)が見つかった。非常に大きく、急激に大きくなっている印象だ」と述べた。専門家でも驚くような事態が起きている。

問われる福島県の態度

福島県から送付される3巡目の検査同意書から「検査をお勧めします」の文言が削除され「(検査に)同意しません」の欄を設けたことが、記者会見で問題となった。2年間隔の検査でさえ新たながんも見つかっている。これまで検査受診率を上げるための議論をしてきた検討委員会の姿勢とも相反している。今後5年、10年の検査は必要だと委員からの意見が相次いだ中、「検査を受けなくていい」と言うような福島県の態度に、記者からの激しい質問がとんだ。県の小林弘幸課長は、「文言の削除は、検討委員会の了承を受けていない。」「県としては検査を受けることを推奨している。文言を記載するかどうか検討する。」とあいまいな回答をした。

星北斗座長は、責任をとり辞任すべき

検討委員会開催直前、星北斗座長は、福島民友新聞に「甲状腺検査縮小」へ議論を誘導するような発言を行った。その責任を記者から追及され「検査縮小とは、ひとつとも言っていない。」「『正しい理解をしたうえで』が前提」と苦しい釈明をしたが、検討委員会に対する県民の不信は高まる一方だ。最後に清水一雄委員は「私は同意書に『検査を強くお勧めします』の文言を載せてもらいたい。『小さながんだから大丈夫』と思っている人でも、気管や神経に近いと言われた人や、エコー検査で発育速度が早いと言われた人は、検査を絶対に受けることを強く勧めます。」と検査縮小に強く反対した。

子どもの命を最優先する対策を求めよう

前例のない手術や経過観察への対応が求められるばかりか、二次検査が必要なB判定の子ども達も2000人を超えた。県立医大だけに任せている現状を検証し被ばく回避を含めた対策を打つべきだ。「自覚症状が出てから検査を受ければよい」という言葉には、子どもの健康を守るとういう責任感は一切感じられない。ともに困難に向きあい、最善を尽くす体制が求められている。

※今回、福島県、県立医大コールセンターに寄せられた14万件余りの県民の要望、不安などの声を県が一部公表した。(詳しくは県庁HP掲載の資料をご覧ください)

甲状腺がんまたは疑いの子ども		175人 2016年9/14発表 本格検査
甲状腺がん または疑い	先行検査	59人 ※先行検査結果の内訳 (A1:28人 A2:26人 B:5人)
手術を受けた 子ども	116人	34人
がん確定	102人	34人
年齢(震災当時)	6歳~18歳	5歳~18歳
性別	男性39人:女性77人	男性25人:女性34人
腫瘍径	5.1mm~45.0mm	5.3mm~35.6mm
対象人数	36万8000人	38万1000人
対象者	原発事故当時18歳以下	原発事故当時18歳以下+ 事故後1年間に産まれた子ども
実施人数	300,476人	270,378人 (2016年6/30現在)
実施年度	2011年10月~2015年4月	2014年4月~2016年3月

＜がんまたは疑い 市町村別174人内訳＞
※良性1人は含まない

【国が指定した避難区域等の13市町村】
先行検査2011年度実施

9人:伊達市	前回2016年6/6発表から 本格検査で 2人増加	
6人:南相馬市		
4人:浪江町		
3人:大熊町		
2人:川俣町、 1人:川内村、富岡町		
0人:飯館村、広野町、楡葉町、双葉町、葛尾村		
【中通り】		先行検査2012年度実施
42人:郡山市		二次検査が必要な子ども (B,C判定) 先行検査 2294人 本格検査 2217人
20人:福島市		
7人:白河市		
6人:二本松市、本宮市		
5人:田村市、須賀川市		
2人:大玉村		
1人:西郷村、泉崎村、三春町、石川町、 平田村、棚倉町、桑折町、中島村		
鏡石町、矢吹町、塙町		
【浜通り】	先行検査2013年度実施	
29人:いわき市 (1人増)		
1人:相馬市		
【会津地方】	先行検査2013年度実施	
8人:会津若松市		
1人:会津坂下町、猪苗代町、下郷町、湯川村 会津美里町、只見町 (1人増)		

保養

平塚保養

体験記

スタッフとして参加しました♪

8月1~4日、Sさん母子(8歳、6歳、2歳)が参加する平塚保養にスタッフとして同行してきました。リュックを背負い、大きなキャリーケースと手荷物、ベビーカーを携えて、新幹線、東海道線乗り継ぎ3時間余。「大丈夫かなあ」との不安も、母親はたくましく、そして子どもたちもちゃんと自分の役割を果たしながら、無事到着。

スタッフの渡辺さんの出迎えを受け、保養先の教会・牧師館へ。遠くに丹沢を望み、晴れた日は富士山も見える金目川堤防沿いにあります。つくやいなや早速、海水浴へ。夜は、スタッフの方が用意して下さった料理で交流会。放射能についての紙芝居も行われました。

食事は毎回、代表の小嶋倫子さんが自宅で作った野菜を使って、味噌汁とおかずを届けてくれました。ご



全世界の核と原発をなくす要は福島である

9/3-12、私が所属する労働組合・動労福島の国際連帯活動でドイツを訪問しました。訪問6日目にベルリンから北西に150km離れたゴアレーベンを訪問しました。そこは核廃棄物処分場建設反対40年の闘いの歴史がある場所です。都心から離れた雄大な自然が広がる地域に核施設を建設する構図は世界共通でした。この反対闘争を中心で闘うケアスティンさん宅に宿泊させていただきました。彼女は2014年に福島を訪れ、3/11に郡山で一緒に反原発デモをした人です。2年ぶりの再会となり、ご近所、反対同盟のみなさん20人で私たちの訪問を歓迎してくれました。

持参した福島の現状がわかる写真に熱心に見入り、「今、闘うことは福島を世界基準にさせない闘いだ」と言われました。また、この日のために用意した英語版「こころ14号」をみなさんゴソッと持っていかれました。心からの福島への関心と連帯の気持ちを感じました。「全世界の核と原発をなくす要は福島である」とみんなが確信をもって口々に語る姿に激励されたと同時に責任も感じました。福島は負けられない。

飯は自分たちで炊いて、お昼のおにぎりを作りました。手順を覚えた6才のしょうちゃんが、喜んで手伝ってくれました。大磯や茅ヶ崎での海水浴、横浜の花火大会、森林公園での川遊び、時間を惜しんで目いっぱい遊びました。小嶋さんお手製の流しそうめんと花火も大好評でした。

平塚では家族ごとに受け入れ、食事も車での移動も丁寧に寄り添ってくれました。本当に頭が下がる思いでした。

福島では、子どもたちを原っぱや川で安心して遊ばせることができない。当たり前なのが出来なくなってしまった現実、改めて原発事故の責任を曖昧にしない、原発をなくしていく闘いを大きくしていかなければと思いました。

婦人民主クラブ福島支部 高橋恭子



＜ドイツから診療所にカンパ＞



9/5に診療所カンパを送ってくださった方が「診療所に持って行って」と送金領収書を拡大コピーし、パネルにしてプレゼントしてくれました。その気持ちに涙があふれ出てきました。

翌日は中間処分場建設現場へ。すぐそばに闘いの年表(1974年~)が常設されています。常に世界の動きと一体で語るゴアレーベンの闘い。年表の下には世界で起きた全ての原発事故が記載してあります。その中でも一番大きくとりあげられているのが3.11です。市内中心部に



ある反対同盟事務所には世界地図に全世界の原発の数、新設数、世界中の闘いが掲載されていました。

毎週、「福島を思う月曜行動」という行動が3.11後から一度も休まず駅前で開催されています。「ほらクリスマスイヴでもやったんだよ」と誇らしげに写真を見せてくれました。

不屈に闘い続けることへの展望と連帯を示してくれたゴアレーベンの闘いと人々。闘っているからこそあふれ出るみんなのおおらかさとやさしさにも触れました。世界から注目と期待、連帯がある福島の闘い。6年目の3・11も郡山から声をあげましょう。